

て、獨り單被花類は古しと云ふ事能はず、未多心皮類の化石が発見されざるのみと考へらる。

又最近 W. T. M. FORBES 氏の如きは逆に石炭紀に羊齒狀種子植物の存在は以て此時代既に鱗翅目の昆蟲 (Am. Nat. vol. 66, p. 452, 1932) が存在せざるべからずと結論せり。尤も植物全般としては風媒花は或は先なりしかも計り難きが、被子植物のみに就て見れば蟲媒花は先に生ぜしものと考ふ。

ぼ だ い じ ゅ

小 泉 源 一

ボダイジュ (*Tilia Miqueliana* MAXIM.) は中部及び西南日本の寺院に栽植されてゐるものであるが、其天生地は発見されない、丹波國天田郡三岳山の山腹には自生状をなせども昔山麓に寺院のありし由なれば或は是に源をなしてゐるや計り難い。

然るに遠藤誠道氏は鹽原洪積層の中よりボダイジュの化石を発見された由なれば日本元來の植物なるは確實なるが、支那に於ける銀杏の如く現世にては唯栽殖品のみに保存さるゝものならんか。

茂木鮮新世末紀化石植物の二三に就て

小 泉 源 一

肥前國長崎に近き茂木村の海岸地層中に埋藏せらるゝ鮮新世植物化石群は、鮮新世の終末時代のものであつて、皆温帶の落葉樹林の要素を以て成るので有名である。矢部博士は此等化石植物の葉は生育當時七百米突許の高地の湖水沈澱地層中に包藏されたものと考へられ、是を今時の氣候に比較され、鮮新末紀に九州の此邊は今より餘程寒冷であつたと結論された、それで日本も鮮新世の終に近く他の北温帶地方と同様氣温は降つた事になるのである。

此茂木鮮新世末紀植物群の種類の同定は有名なる瑞典の故 A. G. NATHORST 博士の研究を主とし、其後大正九年同く Stockholm 市外 Frescati 國立博物館の R. FLO-RIN 博士の研究をも參考にせられたものである。

茂木化石植物群は、誰が見ても温帶夏綠林の分子のみであるのに、兩氏研究の結果、或二三種の同定は全く此事實と正反對の或者を物語つてゐるのは、今日の狀態から見て實に怪訝に耐へないものがある。

それはホルトノキ (*Elaeocarpus Photiniaefolia* HOOK. et ARN.) の存在である、